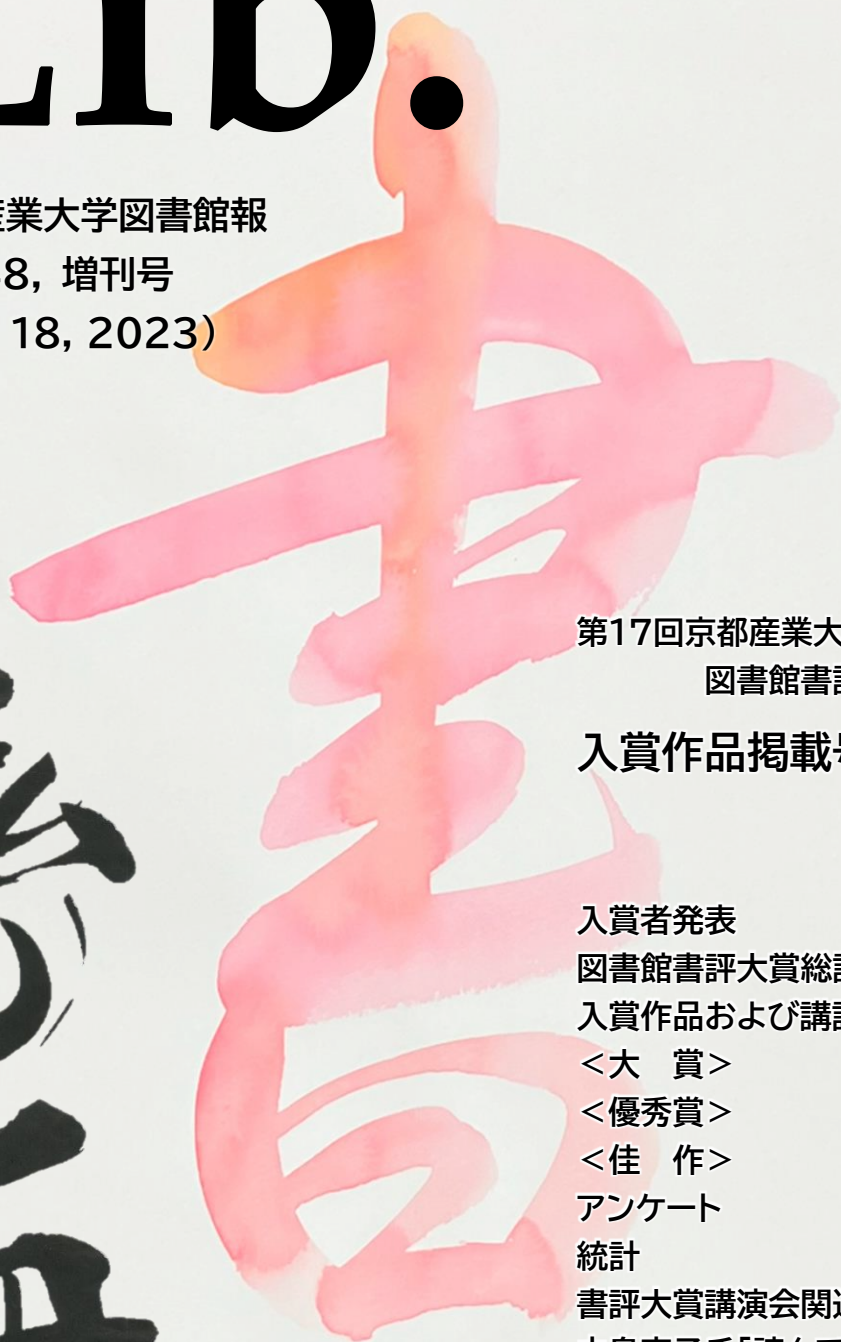


Lib.

京都産業大学図書館報
Vol.48, 増刊号
(Jan. 18, 2023)



第17回京都産業大学
図書館書評大賞

入賞作品掲載号

入賞者発表	2
図書館書評大賞総評	3
入賞作品および講評	
<大賞>	4-5
<優秀賞>	6-9
<佳作>	10-19
アンケート	20
統計	21
書評大賞講演会関連	22-25
中島京子氏「読んで書く楽しみ」	
応募があった図書一覧	26-27
概要	28

巻
一
冊



入賞者発表

第17回京都産業大学図書館書評大賞には83篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の50音順

大賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
かわみつ たくむ 川満 拓夢	法学部 法政策学科 4年次生	とある1つの刑事事件判決から 『イノセント・デイズ』(早見和真著)

優秀賞

みなと さき 湊 咲葵	文化学部 国際文化学科 1年次生	価値ある人生を生きているか 『ミー・ビフォア・ユー：きみと選んだ明日』 (ジョジョ・モイーズ著；最所篤子訳)
やの ゆういち 矢野 佑一	経済学部 経済学科 3年次生	心ひとつ 『コーヒーが冷めないうちに』(川口俊和著)

佳作

あさい ひかり 浅井 白可里	文化学部 国際文化学科 4年次生	想いをレターにのせて 『三島由紀夫レター教室』(三島由紀夫著)
つかもと ゆうま 塚本 侑聖	経営学部 マネジメント学科 2年次生	自己認識と夢 『アルケミスト：夢を旅した少年』 (パウロ・コエリョ[著]；山川紘矢，山川亜希子訳)
なかに けんたろう 中谷 健太郎	文化学部 国際文化学科 3年次生	地獄に堕ちる外はない 『地獄変・邪宗門・好色・藪の中：他七篇』(芥川竜之介著)
ふくなが まゆ 福永 真由	文化学部 京都文化学科 2年次生	生きる意味、幸せとは何か 『夏の庭：the friends』(湯本香樹実著)
まつお さなえ 松尾 早苗	経済学部 経済学科 1年次生	おカイコ様 殺虫事件 『テウトの創薬』(岩木一麻著)

図書館書評大賞総評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 大平 睦美

昨年度より再開した図書館書評大賞であるが、今年度も第17回図書館書評大賞を実施することができた。応募総数は82名より83篇の作品が寄せられた。今回は例年と比較して4年次生の応募が多く、また以前に受賞した学生が再受賞するなど、図書館書評大賞が学生の中に浸透しつつあることが推察できる結果となった。学部別応募状況では、生命科学部より5名の学生が応募するなど、文系・理系を問わず幅広い学生から応募されていることも10の学部が同じキャンパスに存在する本学の図書館の特徴を示している。応募83作品は第1次・第2次選考を経て、大賞1名、優秀賞2名、佳作5名の入賞者8名が決定した。

入賞作品の詳細は講評に譲るとして、今年度の傾向としては人の死や、生きることについて書かれた書評が多くあったことである。2022年はコロナ禍に加え、ロシアによるウクライナへの侵攻など国際的な紛争が連日報道されるなど、生と死や平和について、誰もが自分に関わることとして考える機会が多くなった年であったことへの影響を感じた。入賞作品に選ばれた書評は、国内外の作品があり、書かれた時代も異なるが、いずれも生きることの意味を問うような作品が多く、未来に期待を持ちながらも、将来に対する不安を抱え、その中で自己の確立を模索する大学生の気持ちが溢れているようであった。書評というのは感想文ではなく誰かに本の内容を紹介するものであり、著者のプロフィール・本の概要・作品の背景・感想や批評が盛り込まれている。書評を読んだ人が、紹介された本を手に取り、また誰かにその本を紹介する、そんな読書の連鎖が書評大賞の作品を通じて起きることを期待する。

また、書評大賞に先立ち、6月には直木賞作家の中島京子氏をお招きして、図書館書評大賞講演会を開催した。会場への来場とオンライン視聴のハイブリッド方式で開催し、来場者47名、オンライン視聴者74名の計121名の参加があった。図書館では書評大賞だけに留まることなく、今後も講演会などのさまざまな機会を通じて、本と人との橋渡しになるように努めたい。最後になったが、ご協賛頂いた京都産業大学同窓会、丸善雄松堂株式会社、株式会社紀伊國屋書店のみなさま、そして多忙な中で選考に携わって下さった書評大賞選考委員会の先生方、職員のみなさんに改めて厚くお礼申し上げます。

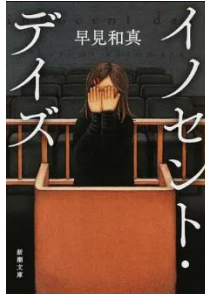
第 17 回 京都産業大学図書館書評大賞



大賞

法学部 4 年次生

かわみつ たくむ
川満 拓夢



書名：『インノセント・デイズ』

著者：早見和真

出版社・出版年：新潮社，2017

「とある 1 つの刑事事件判決から」

令和元年度、地方裁判所での既済総数は約 67,000 人とのことだ(参考・最高裁判所「刑事訴訟事件の最近 5 年間の推移【地方裁判所】」)。このように、1 日に多くの判決が流れる日々となっている。私たちは裁判長から言渡される判決によって、事件の全てが解明した気になってはいないだろうか。本書で起こった事件もそれらの膨大な事件の一件にすぎない。

主人公田中幸乃は元彼の自宅に放火し、元恋人の妻と双子を殺した罪で裁かれている。そして、判決で裁判長は「覚悟のない十七歳の母も一。養父からの激しい暴力にさらされて一。中学時代には強盗致傷事件を一。」「罪なき過去の交際相手を一。その計画性と深い殺意を考えれば一。反省の様子はほとんど見られず一。証拠の信頼性は極めて高く一。」と読み上げ、主人公である田中幸乃に死刑を言渡すところから始まる。この時点で、読者は恋人への思いを捨てきれず犯行に至った残忍な「死刑囚田中幸乃」という思いを抱くだろう。読者はこの感情を出発点とし、この先大きく入り乱れていくだろう。

本作品では、二部構成となっている。第一部では、主人公田中幸乃と過去に関わった人物らの視点で、これまでの彼女の人生を振り返り、冒頭の判決文の一文一文に隠された真実を明らかにしていく。まず、彼女の母が受診した産科医目線で、本当に覚悟なく 17 歳で彼女を産んだのかが描かれている。続いて、彼女の姉や中学時代の同級生目線で強盗致傷事件の真実が描き出されている。更に、彼女が 20 代の頃に付き合っていた恋人(被害者)の友人目線で彼女らの歪な恋愛関係が表現されている。

このように、前半では多くの部分が主人公の視点ではなく他者視点で描かれている。これでは主人公の気持ちの底までは分からないのではないかと思うだろう。しかし、そのようなことはなく、むしろ彼女周辺の人物視点で描かれていることにより、主人公の心情を相対的により深く理解出来る。幼少期には両親と姉、友達らに囲まれてごく普通の生活を送っていた彼女だが、そんな彼女の人生の歯車がほんの少しずつ狂っていく様子を読み取ることが出来る。ここは本作の魅力であり、著者早見和真氏の見事な部分である。また、冒頭の判決文がいかに表面的で真実ではないかが分かるだろう。そして、彼女がこんな残忍な事件を起こすはずがなく、助けたい。死刑を免れて、生きて欲しいという感情を読者は抱くだろう。ここから物語は後半へと続いていく。

第二部では、判決以後が描かれている。死ぬことには向き合っているが、事件に対して反省していないという彼女の気持ちに違和感を覚え、同級生の弁護士らが事件の真相に迫っていく。第一章の伏線が回収され、事件の真相が徐々に分かり、ようやく彼女の無実を証明出来る思った矢先、死刑執行されることが決まる。幼い頃からよく発作を起こし、その都度気

を失ってきた彼女に対して、ずっとそばで見えてきた刑務官は発作をあえて起こさせることで、刑の執行が延期となり、生き延びて欲しいと願う。この場面を本書では「倒れて、倒れて、倒れて、倒れて…。私は心の中で祈り続ける。それは『生きて』と懇願することに等しかった。」と描かれている。「倒れて」と「生きて」が同一の意味となる核心を突いた見事なレトリックとなっている。読者を含め誰もがこの刑務官と同じ気持ちになるだろう。しかし、彼女は初めて自ら発作を抑え、何としても死ぬという強い意志を見せたのである。本作では「幸乃は四つん這いになったまま呼吸を整えようと努めている。」「はじめて見せる彼女の抗おうとする姿」とある。この様子は、本文にあるように正に「彼女が死ぬために生きようとする姿」である。死をつかみ取ろうとする彼女を誰も止められない。むしろ止めてはいけなさと感じさせるこの描写は圧巻である。読者は彼女を助けたいと思うが、望み通り無事執行されて欲しいとも願う複雑な感情になるだろう。そして、最後には彼女や読者にとっても清々しい結末が待っている。死と爽快感という本来相容れない両者が絶妙に一体化し、新境地へと誘われるだろう。他のミステリー小説とは違う人間の心の奥深くまで切り込んだ作品となっている。

最後に、本書で彼女は「もし本当に私を必要としてくれる人がいるんだとしたら、もうその人に見捨てられるのが恐いんです」「それは何年もここ(刑務所)で耐え忍ぶことより、死ぬことよりずっと恐いことなんです。(括弧内筆者)」と語っている。彼女の周りには家族や友達、恋人もいた。しかし、いつも最後は裏切られ、彼女の人生は常に孤独と隣り合わせであった。それが彼女の、一人の女性の心を蝕んでいった。心の底から誰かを信用することが出来なくなっていたのだ。この「必要とされたい」という思いこそ、誰もが日常的に抱えている感情であり、人間の摂理であるように感じる。本作品ではそのことを切に感じる。

選考委員による講評

選考委員代表 生命科学部教員 西田 貴明

まさに大賞に相応しい、素晴らしい書評である。この理由としては、3つあげられる。まず、一つは、インセントデイズ(本書)のストーリーの明快な紹介である。書評には、図書のストーリーの伝達が大事である。多くの人物の視点から描かれる、複雑な話の流れをうまく捉え、全体の構成を示しながら、コンパクトな文章の中に話の展開を適切に表現している。さらに、2つ目は、本書の見どころが実にうまく表現されている。本書に起こる重要なイベント、印象的な話題、強烈な場面について、読者が得られる感情を示すことで、本書を読む中で起こる読者への心の変化を明確に表現されている。そして、最後に、自分なりの解釈は、読者の理解を大きく助ける。書評の主人公の認識や行動に対する解釈は、本書から読者が得られることを具体的に紹介しており、本書を読み終えた後に、書評を見返すことで、読者の理解は一層深められるだろう。従って、この書評は、本書の読者を増やすことはもちろんであるが、読むべきポイントを的確に捉えて、読者の理解を深めることにも、とても役立つだろう。この書評から、さらに多くの人が本書に手を取り、理解を深める姿が想像できる。

入賞者から一言



大賞に選出していただきありがとうございます。私は、これまで受験勉強という形でしか小説を読む機会がありませんでした。今回は就職活動が一段落し、時間をかけて読んでみました。あらゆる角度から日常を観察し、思考、想像する習慣がついたように感じます。これを機に、今後は海外文学に挑戦し、より時空を超えた読書や書評を試みたいです。



優秀賞

みなと さ き
湊 咲葵書名：『ミー・ビフォア・ユー
： きみと選んだ明日』

著者：ジョジョ・モイーズ著；最所篤子訳

出版社・出版年：集英社，2015

「価値ある人生を生きているか」

この小説はよくあるラブストーリーとは少し違う。命について、生き方について深く考えさせられる小説である。この本の著者のジョジョ・モイーズさんという方は約 10 年間ジャーナリストとして働き、その後小説家となったのである。彼女は英国ロマンス小説家協会の年間最優秀ロマンス小説賞を 2 度受賞し、この作品は世界的にベストセラーとなった。

この小説はルーという女性が 6 ヶ月限定で雇われ、2 年前に不慮の事故で四肢麻痺になったウィルという男性の介護をし、命や、自分の生き方について考えていくというストーリーだ。著者によると全身麻痺になったイギリスの元ラグビー選手がスイスにある自殺幫助機関「ディグニタス」という団体に、尊厳死を望み許可を得て命を絶ったという実話をモチーフにして書かれた本である。

ルーの家庭は貧しくて、家族のために生活費をかせぐことに精一杯で自分のやりたいことは何もできていない。一方、ウィルの家庭は裕福で恋人もいて自分のやりたいと思ったことはなんでもできる誰もが憧れるような人生を送っていたが、全身麻痺になってから人を遠ざけるようになった。最初は介護に来たルーに心を開かないウィルだったが、時間が経つうちにだんだん 2 人の心が通じ合っていく。そして、ある日ウィルが尊厳死の施設に予約をしていたことを知る。もし自分の愛する人が尊厳死を望んでいることを知った時どうするのかということについて深く考えさせられる内容である。

タイトルの「me before you」の意味は「君に出会う前の私」であると考えられる。このタイトルのように、ルーはウィルに出会ったことで、ウィルはルーに出会ったことで自分の見えていた世界が変わる。この本を読めば人との出会いがどれほど自分の人生にとって大きいものか知ることができる。

しかし、どれだけその人のことを愛し、愛し合っていたとしても、その人の気持ちを全て理解することは不可能である。愛の考え方の違い、死に対する考え方の違いが 2 人に立ちほだかる。自分だけの気持ちを優先すると相手の気持ちを考えられなくなる。人生は愛だけのためにあるわけではない。人生は自分のためにある。結局すべての決断をするのは自分自身なのだ。私はこの著者の考え方に深く賛同する。

この本の中には印象的なセリフがいくつか出てくる。それは「人生は一回しかない、それを精一杯生きることは人間の義務だ。」というセリフや、「大胆に生きろ、自分を駆り立てろ、小さくとどまるな」というウィルのセリフだ。明日、自分はいつも通りの生活をできているとはかぎらないし、人生はいつ何が起きるのかわからない。そんな中で今、自分のしたいことので

きる環境にいるということに気付かなくてはいけない。当たり前のように毎日を送っているがその時間を無駄にしていないか。大抵の人は明日も生きていだろうと思っている。だが、その保証はどこにもない。これは著者が一番伝えたかったメッセージであると考え。だからこそ、心に響くのではないだろうか。

この小説は3つのことを主にテーマとして扱っている。1つ目は愛、2つ目は尊厳死について、3つ目は自分らしく生きる自分の人生についてだ。それぞれの人生の背景や、なぜ今このような生き方をしているのか、それぞれの考え方の違いが分かりやすく書かれている。本書には彼らを取り巻く人の視点に立った章があり、人それぞれ物の見方や考え方は違う、その人の苦しみを本当に理解することはとても難しいということがより伝わる。

自分の人生を価値あるものにできているだろうか。価値ある人生とは何か。自分らしくいるということはどういうことなのか。という問いかけがこの物語の背景にある。今まで考えてこなかったことを考えるきっかけをくれる本である。私はこの本に出会ったことで自分の生き方、考え方が変わった。最近の人は周りに合わせようとしている人がとても多い。周りに合わせなければ、変わっている人と見られてしまうと感じているのだ。そのような感情を持っている人たちにぜひ読んでほしい。この小説は自分自身の生き方に変化を与えてくれるはずだ。

選考委員による講評

選考委員代表 共通教育推進機構教員 中澤 正江

本書評は、「価値ある人生を生きているか」という問いかけから始まる。本書で「価値ある人生」として描かれるものは、評者も述べているように、「自分らしく生きる人生」ということなのだろう。言い換えれば、「自分の人生に自分で決定権を持つ」ということでもある。人生においては、何か決定する以前に、選択肢がまるで何も与えられていないように思えることもしばしばある。それでも、力強く決定する姿勢を持つことこそ、「よく生きる」ということなのだろう……そんな気持ちにさせる良書である。本書評では、恐らく意識して本編の種々の出来事について具体的に触れることを避け、物語のアウトラインのみを紹介し、テーマの大枠を分析するに留めている。それでいて、本書が評者の人生に与えた影響や、周囲の人々が日常的に感じているであろう閉塞感を打破する効果に触れることで、本書の魅力を伝えることに成功している。

入賞者から一言



まず、入賞できたことをとても嬉しく思います。書評を書くことで、その本を改めて理解し、自分にとって特別な本だということを再確認できました。これからもたくさんのお本に出会ってもっと自分を成長させていきたいです。

第 17 回 京都産業大学図書館書評大賞

経済学部 3 年次生



優秀賞

や の ゆういち
矢野 佑一



書名：『コーヒーが冷めないうちに』

著者：川口俊和

出版社・出版年：サンマーク出版，2015

「心ひとつ」

タイムスリップする小説や映画は数多く存在する。過去に戻って事故や事件に巻き込まれた人を助けに行ったり、未来に行ってまだ生まれていない人に会ったりする話が一般的である。これらの作品は、タイムスリップした先で起きた出来事が現在の世界を変えるという前提の元で作られている。では、過去や未来に行っても現実が変わらないとすれば物語として成立するのだろうか。川口俊和作『コーヒーが冷めないうちに』を読めば自然とその答えにたどり着くだろう。

本書の舞台は、過去に戻ることができるという都市伝説で有名になった喫茶店だ。本書は 4 つの話に分かれている。それぞれの話を簡単に紹介したい。第一話は、アメリカに行ってしまう彼氏と一緒に居たいという本心を伝えられなかった女性の話。第二話は、若年性アルツハイマー型認知症を発症し記憶障害を起こした男性が、妻への手紙を渡しそびれる話。第三話は、妹が交通事故に遭い死んでしまった女性の話。第四話は、心臓に疾患を持っており、出産すれば死んでしまう女性の話。登場人物は全ての話に共通している。

この喫茶店では条件を満たせばタイムスリップすることができるのだが、非常に面倒な 5 つのルールを守らなければならない。冒頭で指摘した過去や未来に行っても現実が変わらないという条件はこの中に含まれている。その他にも、この喫茶店を訪れたことがある人にしか会うことができない、座っている椅子から離れることができない、コーヒーが冷めるまでの非常に短い時間しかタイムスリップすることができないといった厳しい制約が存在する。これらのルールがこの小説特有の面白さでもある。行動は制限され、現実を変えることもできない。登場人物は何故過去や未来へ行こうとするのだろうか。

どんな時でも本音で話せるという人は恐らく一人もいないだろう。相手との関係性やその時の状況にも左右される。しかし、人生には何がなんでも勇気を振り絞って本心を伝えなければならないタイミングが存在する。それを逃すと後に後悔してしまうのだ。例を挙げると、第一話で紹介した女性は、自身のプライドが邪魔をしてアメリカに行かないでほしいという本音を彼氏に伝えられなかったことを後悔している。本書には、この女性のように後悔している人たちがそのきっかけとなったタイミングに戻ることができた際に、どのように行動したのかが描かれている。

ここまでの文章を読んで、この登場人物と自分とでは状況が異なると感じた人もいるだろう。現実の世界ではやり直したいタイミングに戻ることは不可能である。ここで 5 つのルールを思い出してほしい。この小説の中でも現実を変えることはできないのだ。本書の終盤に「(心ひとつで、人間はどんなつらい現実も乗り越えていけるのだから、現実は変わらなくと

も、人の心が変わるのなら、この椅子にもきつと大事な意味がある……)」という一文がある。つまり、重要なことは現実を変えられるかどうかではない。私たちの考え次第で、現実は同じだとしても困難な状況を乗り越えていけるということを教えてくれる。登場人物は過去や未来に行ったことによって今まで知らなかった相手の思いを知り、前向きな気持ちで生きていけるようになる。仮にタイムスリップできる喫茶店が存在しなければ、彼らの気持ちは変わらなかったかもしれない。しかし、現実の世界を生きている私たちも相手の気持ちや思いを想像すれば、ある程度相手がどのように考えているのかが分かるのではないだろうか。先ほども述べた通り、過去や未来に行くことが重要なのではない。どれだけ辛い現実でも捉え方次第で乗り越えられるということが重要なのである。この書評ではあえてそれぞれの話のあらすじを詳しく紹介することを控えた。その理由は、4名の登場人物の心がどのように変化したのかをあなた自身に確認してもらいたいからだ。本書を読めば、辛い現実を乗り越えるためのヒントを得ることができるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 情報理工学部教員 赤崎 孝文

自分の人生はひとつしかない。リセットボタンを押してやり直すことはできない。そのような意味で、本作のような設定にはある種の憧れ・期待のようなものがある。空想・フィクションの中では色々な設定が可能であり、希望(や絶望)も含めて色々な世界を作ることができる。しかし本作の特徴である「現実是不変」ことを仮定すると、人生においてこれから起きるかもしれない事象への対処に幅ができる。対処の引き出しが増える、ということだ。評者は本書の内容を詳しくは紹介していないが、自ら感じたことを表現しており、共感できる。文章の受け取り方・読み解き方は主観的であり、本を読んだときにどのように捉えたのかは読み手によりさまざまである。さてこの書評と講評を読んだとき、あなたは共感できるか否か？いずれにせよ、本を読むきっかけになることを望む。

入賞者から一言



この度は優秀賞に選出していただき、誠にありがとうございます。実際に読んでみたいと思っただけのような書評を書くために試行錯誤を重ねたので、今回入賞することができ大変嬉しく存じます。本書評をきっかけにして一人でも多くの方に魅力が伝わっていれば幸いです。

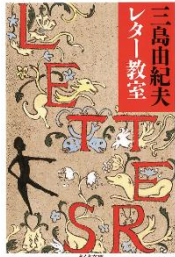
第 17 回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 4 年次生

あ さ い ひ か り
浅井 日可里



書名：『三島由紀夫レター教室』

著者：三島由紀夫

出版社・出版年：筑摩書房，1991

「想いをレターにのせて」

世の中には言葉があふれている。最近では「エモい」など新種の言葉が登場した。世界はインターネットでつながり、指一本で全世界に意識を飛ばし、英語をはじめ各国の言葉に触れることが容易になった。連絡手段も進化し、SNS や LINE で短く連絡を取ることや、はたまたメールで事務的なやり取りをするのみの世の中になりつつある。コロナの影響で「知り合い」との関係を断ち切り、「本当に仲が良い友人」だけと連絡を取るようになった大学生も増加したという報道もある。それでは、このように変化した世の中で、相手ただ一人を想って数多の言葉を紡ぎ、想いを伝える「レター」を出すのはどうだろう。

この作品には 5 人が相互に出したレターが収録されている。45 歳の元美人、自宅で英会話教室を経営する上流気取りの氷ママ子、彼女と同年で皮肉屋かつ田舎臭い有名な服飾デザイナーの山トビ夫。20 歳で氷ママ子の教室でからきし英語が駄目だった「どこをついてもピチピチと音が聞こえるような」可愛い空ミツ子、23 歳で貧乏ながら芝居の演出に精進する大真面目な理屈っぽい青年の炎タケル。25 歳でミツ子の従兄、大学を 3 年留年しているまん丸肥って楽道家、テレビが大好きな丸トラー。共通点は筆まめであるということだ。彼らは、不倫相手にはらわた煮えくりかえる気持ちで書いた脅迫状、恋仲を裂くための陰謀の手紙、借金の申込状、女性を肉体的に全力で口説きに行った手紙を送り合う。およそ他人には絶対に見られることのないレターで交流を深め、愛憎劇に走り、複雑に糸が絡まり合う。

三島由紀夫の作品で、内容の滑稽さやどこか登場人物と共感してしまう面もさることながら、特筆すべきは登場人物によって使い分けられるレター内での言葉の使い方である。山トビ夫が空ミツ子に送ったラブレターがある。レターでは、照れくさく恥ずかしいことも言えると「あなたに「おじさま」と呼ばれるのは辛い、せめて手紙を読む間は、「おじさま」という呼び名を忘れて、私を一人の男性として扱ってくださるように希望します」(30)と前置きをする。トビ夫はミツ子に「あなたの唇は、まるで今朝作られた唇のように新鮮で、できたての奴をもぎとってきて、今、セロファンをむいたところという感じで、そこへアイスクリームがまつわりすくありさまは、新しい靴をぬかみで惜しげもなくよごすみたいで、およそもったいなかった。」と、その唇を多くの比喻で表現し、惜しげもなく褒めまくる。「髪切りましたか」や「雰囲気変わったね」など話し言葉では、およそ足元にも及ばない、相手への求愛の言葉の数々を作者はレター上で操る。

操るのは、愛の言葉だけではない。ミツ子とタケルは惹かれ合い恋仲になる。一方ママ子はタケルの「若い青くさい年ごろの、自分でも処理できないこんがらがった糸みたいになっているところが魅力的で—(中略)—そっと抱きしめてやりたい気を起こさせます」というほどに

惚れているが、トビ夫曰はく中年の恋である。ママ子は、2人の恋路に水を差すためマルーをスパイにし、タケルを「羊の皮を着た狼、糖衣をかぶせた毒薬、この世の悪の根源」と評し、生活に困窮しながらもタケルと深い仲になり将来の再婚相手にと想っている女性を装ったレターをミツ子に送る。結果、ママ子との思いとは裏腹に、ミツ子とタケルの恋は一層燃え上がる。ママ子はトビ夫に真実を打ち明け、彼らの結婚を邪魔するように要求するが、トビ夫は気が変わり結婚へのアシストをする。ママ子から「裏切られた女からの激怒の手紙」が届く。「あなた薄よごれた不道德な中年男で、女を喜ばせるためにチョビ髭を生やし、その髭でもってわずかにデザイナー界で男性をもって任じている、あわれな、あわれな、あわれな、胃弱の電信柱じゃありませんか」と自分が恥ずかしい告白をしたにも関わらず、裏切られた悲しみに心の底からの憎しみ、侮蔑の言葉をレターに書き連ねる。しかし、トビ夫はママ子に彼女同様の憎しみをもたない。なぜならトビ夫はママ子と悪だくみを共にする中で、彼女に惹かれていったからだ。このようにレターは直接自分の心を相手に晒すツールとして使われ、その中で言葉は百人百様駆使される。どの手紙も喜怒哀楽以上の情を表現しながらも、その根底に流れるのは相手を思う情熱である。

作品最後、著者から読者に向けられた手紙がある。「世の中の間人は、みんな自分勝手の目的に邁進しており、他人に関心を持つのはよほど例外的だ、とわかったときに、初めてあなたの書く手紙にはいきいきとした力がそなわり、人の心をゆすぶる手紙が書けるようになるのです」。いつの時代も言葉を紡ぐとき、重要なのはまっすぐ相手を想う情熱である。この作品を読めば、愛、憎しみ、喜び、感情渦巻く言葉のレターをあなたもきっと大切な人に書きたくなるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 藤井 秀昭

本書評は、コロナ禍で孤独な時間と空間のなかで過ごすことを強いられている私たちにとって、お勧めの本を簡潔に手際よく紹介することに成功している。

そこで私も本書を読んでみることにした。三島由紀夫といえば『潮騒』『金閣寺』などの純文学の作品で硬派のイメージが強いが、本書は1966年に女性週刊誌に連載された作品であることを知った。本書では登場人物は5人しかいないが、いくつもの出来事を手紙の文例集にもなり得る形式で綴られていて、それぞれの読者の年齢に応じて豊かな小説の世界としての想像空間を提供してくれる。

本書評では、手紙のなかで操られた数々の言葉について言及しているが、実はそれらの源泉が「相手を想う(思う)」情熱にあるのだと強調している。三島が56年も前に執筆した本書が、特殊なコロナ禍の社会環境においても十分に新鮮な息吹を読者に与え、手紙により相手を想う情熱の大切さを教えてくれるとする本書評に共感できる。

入賞者から一言



この度の選出、大変光栄です。この作品の登場人物は愛くるしくて、どこかクスツと笑えたり、読者に寄り添う作品だと感じました。皆様の読書体験に少しでも貢献できたのなら幸いです。最後に私事ですが、大学生活やゼミを通し書評大賞に応募してまいりました。文章力を磨けたのは、何事にも変え難い経験になりました。ありがとうございました。

第 17 回 京都産業大学図書館書評大賞

経営学部 2 年次生



佳作

つかもと ゆうま
塚本 侑聖



書名：『アルケミスト: 夢を旅した少年』

著者：パウロ・コエーリョ[著]

； 山川紘矢, 山川垂希子訳

出版社・出版年：角川書店，1997

「自己認識と夢」

夢を持ち続けること。それがなぜこんなにも難しいのだろうか。子供時代には「夢を持つことの大切さ」を呪文のように何度も何度も教えられたはずだ。しかし現実には、いつまでも夢を追っている人を馬鹿にする風潮すらある。子供は夢をあきらめることで大人になるのか。パウロ・コエーリョによる著書『アルケミスト』は、我々が大人になる過程のどこかで置いてきてしまった何かを見つけていく物語だ。

本書の主人公は、羊飼いの少年サンチャゴだ。彼は羊飼いとして様々な街を放浪していた。そんなある日、夢占いができる老婆から「ピラミッドで宝物を見つける運命にある」と告げられる。彼は当初、半信半疑だったが飼っていた羊をすべて売り、運命のためにエジプトへ向かう孤独な旅を始めるのだ。ピラミッドまでの道程は険しく命の危険に遭う場面もあるが、サンチャゴは自分の心を深く見つめながら懸命に歩を進めるのだ。

この作品の本質は、サンチャゴが自分や他者をどう観察するか、そして旅をする中でどう変化していくのかという点である。作中では王様や錬金術師や族長が登場する。「前兆」だったり「神」だったり、馴染みのない言葉も幾度となく使われている。ただのファンタジーだと鼻で笑う人もいるかもしれない。しかし、サンチャゴの旅する姿は真剣そのものだ。そして彼の思考は、我々の自己認識をより自由にするものである。次に引用する文章は、そのことを鮮明に示している。

「風が自分の頼みをもう少しで聞いてくれそうだと見てとって、少年が言った。『愛されている時、あなたは何でも創り出すことができます。愛されている時、あなたは何が起きているか、理解する必要はありません。すべては、あなたの中で起きているからです。そして、人は自分を風に変えることさえできるのです。もちろん、風が助けてくれればのことですが』

読めばわかるように、この場面でサンチャゴは風と会話している。それと同時に、すべてはあなたの中で起きていて人は風にもなれるともいう。つまり、自己と他者の境界が極めて曖昧になっているのだ。サンチャゴにとって以前飼っていた羊も、アフリカの砂漠も、風や鳥でさえも自分の一部であり、裏返すと自分も羊や砂漠の一部になる。彼は“自己”をととても広い範囲で認識している。物理的な概念を超えて、自分に影響を与えるものはすべて取り込んでしまおうという姿勢が見てとれる。では何故サンチャゴはこのような思考に至ったのか。作中の錬金術師を目指す男の言葉は読者に重要な示唆を与えるものだ。

「錬金術師は何年もずっと、実験室で金属を純化する火を見て暮したのだ。彼らはあまり長い時間、火のそばで過ごしたので、次第次第に世の中の虚飾を捨て去ってしまった。彼らは、金属を純化することは自分自身を純化することだと発見したのだよ」

世界のすべてのものは、自分に教訓を与えてくれる。錬金術師にとってそれは金属だった。サンチャゴにとって教訓を与えてくれたのは羊や鳥や砂漠だった。そうしたものの支えがあったからこそ彼は過酷な旅を続けることができたのだ。夢を持ち続けることも同じではないだろうか。他人の夢を馬鹿にすると、その批判者は自分と他者を完全に分けて考えている。この態度は世間の当たり前なのかもしれない。しかし、人間は体が分かれていたら自分事として捉えられないような無機質で冷たい生き物だろうか。

読者はサンチャゴを通して、かつて自身が描いていた夢を思い出すだろう。愚直に夢を追う姿に大きな共感を覚え、次第に彼を応援する気持ちになってくる。つまり『アルケミスト』の読書体験こそが自己認識を拡張させる作業になるのだ。次に読者に求められることは、読書で得た経験を現実の生活に反映させていくことだ。サンチャゴ少年を応援したのと同じように、実世界の他者にも寛容に接することが必要なのだ。本書はそうした自己認識の広がりとして、そこから生じる共助の様子を魅力的なストーリーで伝えている。

2022年2月ロシアがウクライナに侵攻し、7月23日現在においても戦争が続いている。日本でも、選挙期間中に元首相が射殺されるという事件が発生した。読書は、こうした日常の危機に対して無力なのか。私はそうは思わない。本書を読んで私が感じたことは、今まで述べてきたように自己認識を拡張し、自分事として捉えることである。思うに、危害を加えた者を“狂っている”とか“理解不能だ”とか言って排除しようとすることは却って他者との溝を深め、日常が不安定化するのではないだろうか。問題から目を背けずに向き合うことでしか解決策は生まれない。

我々は今、“分断”という大きな問題に向き合わなくてはならない。本書はその手助けをしてくれる。サンチャゴがそうしたように、今を見つめ地に足をつけて前に進む。人々が思いやりを持って今よりも平和な世界にしたい。それがずっと持ち続けたい私の大きな夢だ。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 大平 睦美

羊飼いの少年サンチャゴがある夢を見たことをきっかけに、壮大な旅へ出かける物語です。旅で出会った人々と関わりながら、ある時は助けられ、またあるときは誰かを救い、そして騙され、少年が旅の中で自分を築いていく様子は、大学生のみなさんが、大学という枠を越えて社会にでる時にもつ不安や期待にも通じるように思えました。

この書評から、少年サンチャゴの様に夢を持ち続けること、さらに夢を実現するために努力し、学ぶことの大切さを知ることができるでしょう。中でも少年が旅の途中で何度も自分の心に問いかけるように、夢とは自分ひとりのための夢ではありません。アルケミスト(錬金術師)として何ものをも金にすることができる力をもつというのは、書評にあるように人々の平和を願うこと、平和を願い、平和な世界に生きるためには他者を認め、互いに尊重し合うことであり、アルケミストではないけれど、今私たちが改めて考え、実行すべき事であると思います。

入賞者から一言



今回このような賞を頂けて、大変光栄です。正直、この書評にはあまり自信がありません。しかし、『アルケミスト』の持つ魅力に引き摺られるようにして何とか書き上げました。私の書評から、その魅力が少しでも伝わることを願っています。また、本を読むことの楽しさを教えてくれた祖母に感謝したいです。

第17回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 3年次生

なかに けんたろう

中谷 健太郎

地獄変・邪宗門
好色・藪の中

他七篇



芥川竜之介
70之
岩波文庫

書名：『地獄変・邪宗門・好色・藪の中』
：他七篇』

著者：芥川竜之介

出版社・出版年：岩波書店，1980

「地獄に堕ちる外はない」

時は平安時代のことである。絵筆を握らせたならば、良秀の右に出る者はいない。良秀は「本朝第一の絵師」とも称される、天才的な絵師として人々に知られていた。しかし、その容貌は猿にも例えられるほど醜く、また性格も傲慢で捻くれており、決して人から好かれる人物ではなかったという。これが本作、『地獄変』の主人公、良秀である。そして本作の著者・芥川龍之介は、言わずと知れた日本の近代文学を代表する作家のひとりだ。芥川龍之介は本作で、絵師として天賦の才を持ちながら、非常に倒錯的な人物像を持つ一人の男、良秀を通して、芸術とは、延いては人間とは何かを問う。

ある時、大殿様は良秀を呼びつけ、凄惨な地獄を象った「地獄変」の屏風絵を描くように命じる。仰せを受けた良秀は、それから数カ月間、我を忘れて創作に没頭する。しかし、地獄を表現するために、弟子を鎖で縛り上げ、または蛇や野鳥に襲わせるなど、その創作風景は異常を極めていたという。屏風の完成も間近のところ、良秀は屏風の要を描き上げるため、燃え上がる牛車が見たいと大殿様に願った。その願いを聞き入れた大殿様は、ある夜、良秀の目の前で婦人を乗せた牛車に火を付けさせる。しかし、その車に乗っていた婦人とは、紛れもない良秀の愛娘であった。炎に包まれ焼け爛れていく娘の前に良秀は苦悩する。しかし、やがて彼は、その様相に恍惚の眼差しを向ける。良秀は、眼前に広がる惨状を、厳かな態度で、じっと眺めていた。

芸術に対し過剰な執着を見せる良秀にも、唯一人間らしい部分があった。それが彼の一人娘の存在である。良秀は愛娘のことを溺愛していた。娘は良秀には似ても似つかぬど気立てがよくて可愛らしく、堀川の大殿様からも好意を寄せられるほどであった。堀川の大殿様とは、都の人々から尊敬されていたと語られる、大変位の高い人物である。良秀は堀川の大殿様の膝元で創作を行い、大殿様も良秀の才能を認めていた。しかし、良秀という存在は彼の芸術への執念だけが全てではない。物語は地獄変を描き上げた絵師としての良秀の自死によって幕を閉じるのである。良秀が炎の中で愛娘を失った瞬間は、娘の親としての良秀の死の瞬間でもあった。物語が進むにつれ、自らの娘さえも芸術に昇華させる良秀の創作への激情、権力のままに一人の娘を焼き殺した大殿様の卑劣な嗜虐心、人間の様々な本性が浮き彫りとなる。そして、地獄変の屏風を取り巻く物語もまた、人間の歪な心情の交錯によって織りなされるのである。つまり、常軌を逸した創作への激情だけではない、愛娘へと向けられる愛情もまた、良秀を良秀たらしめていた一面である。そして、父性という良秀の中で最も人間的な心情の喪失は、残された「芸術家」としての良秀に、悲惨な末路をもたらした。

『地獄変』の物語の中核は、良秀という一人の人間の、純粋な芸術への崇敬に他ならない。しかし本作に語られる人間とは、美德も醜悪も共に内在する、曖昧で測り難い存在なのである。だからこそ人々は、一切の人間性を顧みず、創作への激情という一心のもとに描かれた地獄変という究極の芸術に心を奪われるのだ。

「如何に一芸一能に秀でようとも、人として五常を弁えねば、地獄に墮ちる外はない」（芥川龍之介『地獄変』p.81）

これは作中の人物、横川の僧都という都の僧侶の、良秀に対する非難だ。良秀の籠の外れた芸術への献身は、人の道徳心さえ顧みない破戒的な振舞いであるとして、都の人々から手酷く非難される。しかし、良秀の描き終えた地獄変の屏風は、日頃彼を恨む者さえも厳かな心にさせるほどの荘厳さを帯びていたという。芸術は畢竟、人の営みに過ぎず、読者もまた、良秀の行いも度が過ぎていてのではないかと思うことであろう。しかし、常軌を逸することが必ずしも悪に成り下がるとは限らない。何もかもを一つのことには捧げられる人間は、常識、あるいは「人間」という枠組みそのものを超越しうる。そして、人間性さえも擲ってまで創作された被造物は神性を帯びた。文化の範疇にありながら、常識や理解を超えた被造物を、人間は「芸術」と呼び、礼讃するのだ。本作の著者・芥川龍之介は、元来曖昧な存在たる人間の良秀が、「人間」を超える瞬間としての芸術を、この物語に描き留めたのである。良秀の地獄変を拝観した横川の僧都は膝を打ち、思わず言葉を溢す。「出かした」（p.81）と。

人間は、それ自身が曖昧で測り難い存在でありながら、正常と常識が保たれることを期待し続ける。そして自らが人間でありながら、人間という枠組みを擲って芸術に挑戦する良秀の生き様は、まさしく狂氣的なものとして人々の目に映るのであろう。しかし、それが如何に残酷で悲惨なものであっても、この物語から目を逸らせないのは、『地獄変』の美しくも獣性的な人間の本質に、誰しも共鳴する部分があるはずだからである。

引用

芥川龍之介『地獄変・邪宗門・好色・藪の中 他七篇』p.81

選考委員による講評

選考委員代表 共通教育推進機構教員 中澤 正江

『地獄変』は、語り部の「語り」によって最初から最後まで表現された作品である。個人的には、語り部のなんとも形容し難い、胡散臭い語りように惹かれる。本書評はそれに対し、語り部の語る内容を絵師・良秀を主人公とした物語と受け取り、要約して紹介した。かなり詳細な要約であるにも関わらず、「語り」の胡散臭さの主要部となる良秀の娘の噂や大殿の不可解な言動、猿の良秀の存在は大胆に割愛されている。この点が興味深い。評者は、ここに表現されたものは「人間という枠組みを擲って芸術に挑戦する良秀の生き様」と言う。また、『地獄変』の美しくも獣性的な人間の本質に、誰しも共感する部分があるはず」とも。そんな話だったのだろうか？と思い、読み返した。すると、怪談めいた体験談を熱心に披露する語り部の個性はやや後退し、確かに本作品は、己の「美しくも獣性的な人間の本質」と対峙する態度というものを、描き出しているようにも読めた。

入賞者から一言



この度はご選出いただき、誠にありがとうございます。過去に芥川龍之介の作品を読まれた方々にとっても、本書評がもう一度彼の作品を手取るきっかけとなれば幸いに思います。今回の入賞を励みに、今後も更に良い文章が書けるように邁進して参ります。

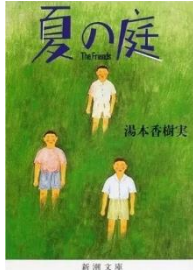
第 17 回 京都産業大学図書館書評大賞

文化学部 2 年次生



佳作

ふくなが まゆ
福永 真由



書名：『夏の庭：the friends』

著者：湯本香樹実

出版社・出版年：新潮社，2001

「生きる意味、幸せとは何か」

『夏の庭:The Friends』は、3人の少年とおじいさんが共に過ごしたあるひと夏の話である。物語は、夏休みが直前に迫った小学6年生の少年たちが人の死に興味を持つことから始まる。「死んだらどうなるんだろう。」「それでおしまいなのかな……それとも」小学生ならではの純粋な好奇心は彼らを読者が驚くような行動へと誘う。その行動とは、もうじき死ぬだろうと噂されている近所の孤独な老人が1人で死ぬところを観察することであった。

はじめ、少年たちは観察対象であるおじいさんに気づかれないよう、静かに尾行を始める。ここで彼らが見たおじいさんは、人生の余暇を特にすることも無く退屈に過ごしている、いわば生ける屍であった。しかし、夏休みが始まり、彼らの「観察」が熱を上げたことにより、彼らの存在はおじいさんにばれてしまう。このことは観察者である少年たちと、観察対象であるおじいさんとの関係に大きな変化をもたらすこととなる。

さて、本作の見どころはここから始まる少年たちと孤独なおじいさんの少しずつ深まっていく交流である。少年たちを冷たくあしらっていたおじいさんが少しずつ心を開き、少年たちと夏の思い出を作っていく過程の描写が非常に繊細に書かれており、読者は、彼らの見た光景を容易に想像することができる。交流を重ねる中で変化したのは彼らの関係だけではない。少年たちはおじいさんと過ごす中で、生活の知恵など様々なことを学び、沢山のひとと交流し、「生き方」を学んで大人になった。一方で、孤独だったおじいさんもまた、少年たちと関わったことで生きる意味を見出すことができ、さらに自らの過去と向き合う機会も得た。

ページを進める度に、彼らの成長に胸を打たれ、少年たちとおじいさんの温かい交流がいつまでも続いてほしいと願ってしまう。しかし、死は平等に、そして突然訪れるものである。物語の最後、少年たちは「死」に触れることとなる。それは彼らの当初の目的が達成された瞬間であったが、その頃には、もはや彼らにとっておじいさんは観察対象ではなく、かけがえのない大切な存在となっていた。

本作のテーマは「死とはなにか」ということである。人間にとって「死」は未知であり、恐怖の対象である。現実主義者であれば「死とは無になることである」と答えるだろう。たしかに死者は喋ることができないし意思も持たない。あながち間違いではないのだろう。しかし、作品の中でおじいさんと少年たちは、「死はその人の終わりではない。死者は死んでしまっても関わった人々の心に生き続ける」ということを私たちに教えてくれる。おじいさんの葬儀で少年が発した言葉の中に、特に印象に残ったものがある。「すごくさびしい。心細い。だけどそれは、結局ぼくの問題なのだ。おじいさんは、充分、立派に生きたのだ。おじいさんの白い骨が、ぼくにそう教えてくれている。(中略)ぼくもがんばるよ。」

未熟だった少年たちは、おじいさんとの関わりを経て、精神的な面において大きく成長した。そしてその成長は、彼の死によって止まるわけではない。彼から経た知識や体験を糧に、さらに成長していくのだ。彼らはきっと、おじいさんから教わった沢山のことを生涯、忘れることは無いだろう。そして、彼と過ごしたひと夏の思い出を抱えながら長い人生を歩んでいく。それは、おじいさんが彼らの中で生き続けていることに他ならない。

本作を読む中で読者は、不思議な没入感を味わうことになるだろう。作者は巧みな文章表現で読者を少年たちのひと夏へと誘い、読者は自身も彼らと交流していたかのような感覚に包まれる。そうして、読み終わった後に読者の心に残るのは、ひと夏の素敵な思い出と大きな喪失感である。自分はこれから生きていく中で、おじいさんのように誰かの心に何かを残すことができるのだろうか。生を受けたことに意味を成すことはできるのだろうか。[夏の庭：The Friends]は読者に、「死」というテーマを通して生きる意味を問いかける。

選考委員による講評

選考委員代表 情報理工学部教員 赤崎 孝文

書評の最初の2行を読ませていただいた時、この本のバックグラウンドがすんなりと頭に入ってきた。非常に良い書き出しである。そのなかでも私は「人の死」というキーワードに釘付けになった。人は間違いなくいつか死ぬ。自らを振り返ると、若かりし時は自分の死を「わからないのが不安」と漠然と捉え恐れていた。しかしこの年になり、周りで身近なひと・お世話になったひと・過去に関わりのあったひとたちが亡くなられることも多くなり、そのひとを想うことが多くなった。評者が取り上げている「死とはその人の終わりではない。死者は死んでしまっても～」の下りが、まさに今感じている私の死生観そのものである。書評しか読ませていただいておらず本作は読んでいないが、その過程は私がこれまで生きてきたことと多くが重なり、評者も述べている「没入感」を二次的に感じる事ができている。この点も書評としては秀逸である。私も本作を手にとって精読することにより、没入感を感じてみたいと思う書評であった。

入賞者から一言



この度は選出いただき、ありがとうございます。話をどこまで要約するべきか、どのような言葉を使えば読み手に上手く伝えられるのか、沢山悩みながら書きましたが、書評として成立していたようで安心しました。これからさらに文章力・語彙力ともに鍛えていきたいなと思います。

第17回 京都産業大学図書館書評大賞

経済学部 1年次生



佳作

まつお さなえ
松尾 早苗



書名：『テウトの創薬』

著者：岩木一麻

出版社・出版年：KADOKAWA，2022

「おカイコ様 殺虫事件」

製薬会社は創薬と呼ばれる新薬の開発を行う企業、ジェネリックという特許切れの後発薬を作る企業、その両方を行う企業に分けられる。この「テウトの創薬」は、研究開発にしごきを削る創薬企業が舞台となった作品である。作者の岩木一麻は神戸大学大学院自然科学研究科を修了し、国立がん研究センター勤務、放射線医学総合研究所で研究に従事したいわゆる専門家であるため、小説の中にはバイオ医薬品、バイオベンチャー、産学連携、日本の医薬品貿易赤字問題、敵対的TOB、遺伝子解析など、昨今新聞紙上を賑わす言葉がずらりと並び、読者は作品にリアリティや躍動感を感じながら読み進めることができる。

タイトルのテウトとは古代エジプトの神で、トとも呼ばれる知識・医療をつかさどるトキの頭を持つ神とされる。物語の舞台は、このトを社名に冠したトトバイオという、バイオベンチャー企業。トトバイオは、群馬県前橋市富岡製糸場の隣という昔から養蚕の盛んな土地に研究所を持ち、カイコを利用して創薬を目指している。ここの若き研究開発部長進藤颯太郎が主人公である。彼は幼いころ小児がんを患い、そのことが医療の道へ進むきっかけとなった。在学中に低分子医薬品を研究。奨学金を得て留学、渡米研究中に抗体医薬品研究に変更し、誘われてトトバイオに勤務することになった。低分子医薬品とは化合物、つまり合成ができるものであり、抗体医薬品とは化合物ではないため合成ができないものという違いがある。トトバイオは、カイコの体内で抗体医薬品を作り、それを繭にさせ取り出す新技術を開発した。鶏卵によるワクチン製造が最長9か月かかるのに比べ、カイコに培養させると7週間である。また、実験施設の広さはわずか20平方メートルであるが、承認された場合の薬価はこの施設だけでも安く見積もっても10億円である。まさにおカイコ様なのである。ところが、順調に行っていたはずの研究に陰りが出てくる。それがカイコの大量殺虫事件であった。この事件を契機に、産学連携の学の方の大学研究室のアカハラから、化学顧問の解任、利権をめぐる敵対的TOBなどの問題が噴出し、そこに、進藤の大学時代のライバル上河内がからんで、話は進んでいく。

内容が盛りだくさんのようではあるが、作中に出てくるプレゼンや、医薬品等の審査を行う厚生労働省の独立行政法人での説明の場面で、語彙の説明が盛り込まれるため、すんなりと話に入り込める。

この作品の読後感は、殺虫事件や、利権に絡む人間の欲が描かれていたにも関わらず、さわやかであった。その理由の一つに上河内の存在があると思う。彼は進藤のライバルで、常に「進藤颯太郎に勝ちたい」と思っている人物であるが、「俺は復讐したいわけじゃない。あいつに勝ちたいだけだ。誤った方法による勝利など敗北以外の価値しかない」と言っただけの。姑

息な手段で進藤を罠にはめた人物にはない、普通の人間の姿-フェアな立場で競争し努力する人間-であった。理由の二つ目は、化学の可能性を感じさせるところだと思う。この3年ほど、新型コロナの影響で、いわゆる化学分野がとても発展していると思う。人類は、何か厄災があるとその分野に特化した技術がとても発展する。戦争時には、武器等の技術が、また最近の日本の二度の大震災では、制振、免振、減災と地震に関する技術が発展してきた。「予想して対策を立てるべき」とはよく言われるが、人間は、困難に直面し、のっぴきならない状況に陥ると、その状況を打破するための技術を生み出す力が出る。この物語は、不可抗力(例えばコロナなど)により、困難な状況にある読者に希望を与えてくれる。ただTOBに対して、あわやというところでエンジェル企業が現れるところは唐突感があり、もう少し伏線を張ってもいいのではと思ってしまった。巨額の利権が絡むため、水面下で動くというのは現実でも基本ではあるが。

小説ではあるものの、作者の知見や専門性により、内容が現実味を帯び、かつ科学的根拠に裏打ちをされているため、突拍子もない物語とはなっていない。以前、「日本経済新聞は人間の欲望新聞です。だから読むと人間の欲望が理解できます」という話を聞いたことを思い出した。この作品は、日本経済新聞を読むよりは簡単に、ベンチャー企業を取り巻く現実、利権に絡む人間の欲など盛りだくさんのことを、作品の中で体験しながら理解できる。そういう面白い本である。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 藤井 秀昭

本書評は、創業ベンチャー企業を巡る企業小説『テウトの創業』のあらすじを簡潔に上手に纏め上げたうえで、社会的見地から、本書から得た独自の着眼点を二つ提示している点が大変興味深かった。

一つは競争をフェア(公正)と捉える考え方を本書の登場人物の行動から読み取っている点であり、もう一つは化学分野における「学問の発展」と「技術の進歩」の要因が周辺環境の困難さと深く関係しているとする見方を論じている点である。

コロナ禍でバイオベンチャーを巡る動きは今日的に世界で最も注目されている分野のひとつである。日本では文化的には『お蚕様』に馴染みが深く、その遺伝子組み換えカイコの繭から抗体医薬品を抽出する技術開発を巡る事件が、本書の中心的位置を占めている。できれば、本書評の後半部分で、新聞との対比を議論するのではなく、上述の二つの着眼点をもう少し普遍化するなどして、より深い議論を展開してほしかった。

入賞者から一言



このような賞をいただき、本当にありがとうございます。

読書は大好きですが、「人に読んでもらいたい」気持ちを表現するのが、こんなに難しいとは思いませんでした。

また、入賞するとは思わず、驚きとうれしさでいっぱいです。今後も楽しんでいろいろな文章に触れていきたいと思います。

第17回 京都産業大学図書館書評大賞 アンケートと統計

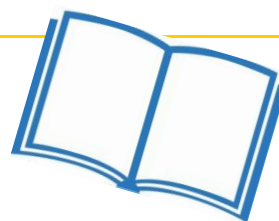
アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- 去年も応募して、また挑戦したいと思ったから。
- 書評を書くのが楽しいから。
- 読書をしていて、自分の考えや意見を持つことや知識を得ることはあったが、書評という形で本を批評することがなかったのでこれを機会に挑戦してみたいと思ったから。この本を他の人にも知ってほしいと思ったから。
- 書評を通して、作品について理解を深めることができ、私の卒業論文にも生かせる部分があると考えたから。
- 自分の書いたものを読んでもらう機会はなかなかないから。
- 今回テーマにした内容は小学生の時から感じていたことであり、どこかで発表したかったから。
- 教員から応募するよう推薦があったから。
- 授業・ゼミ活動の一環として。

Q2) 書評の対象図書をどのように選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- | | |
|--------------|-----|
| ➤ 興味のある分野だから | 34人 |
| ➤ 好きな作家だから | 15人 |
| ➤ 先生からの推薦・指示 | 7人 |
| ➤ 図書館で見つけたから | 5人 |
| ➤ 話題の本だから | 3人 |
| ➤ その他 | 6人 |



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(50人)(理由)

- 本を読んで自分の意見と照らし合わせながら書評を書くのは面白いと思ったから。
- 他の人にも知ってほしいという思いがあるから。
- 書評を書くのは時間がかかるが有意義な時間であり、知識も増えたから。
- 自分の興味のあることを自分から進んで読み、知識を得て人に伝える大切さを感じたから。
- 他にも読みたいけど読めていない本がたくさんあるから。
- 書評を書くことで、それまで気づけなかった本の魅力に気づくことができると思うから。
- 本を批評するという視点で本に向き合うことで客観視して捉えられ、考えの幅が持てるから。
- 一冊の本とこれ程まで向き合ったのは今回が初めてであり、この経験は書評大賞に応募したからこそ味わえたのだと思ったから。

「いいえ。」(20人)(理由)

- 卒業するから。
- 就職活動が始まり、書評を書くことが困難になるから。
- 書評をすることが難しかったから。
- 自分の思いは自分の内でとどめておきたいから。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

- 読みやすい単語や文を考えて修正していくのは難しいけど楽しいと感じた。
- 本に対して自分の評価をしつつ、他人に勧めることの面白さを感じることができた。また、他の人がどのように書評をしているのに興味をもった。
- 普段本を読まないのをこれを機会に読む習慣をつけようと思った。
- 作品を再読読んだことで作品の何に驚き何に惹かれたのか、一読したときに言語化できなかったものがキチンと整理され執筆後は気分が良かった。
- 2000字以内で収めるのが難しかった。

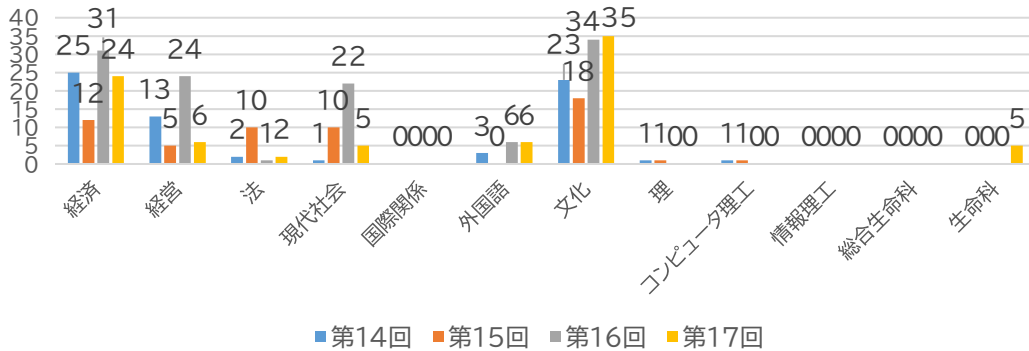
Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- 純文学を書いている方や文学の研究をしている方の話を伺ってみたい。
- 小説家の方のお話を聞いてみたい。
- 書評大賞講演会が開催されること自体知らなかった。

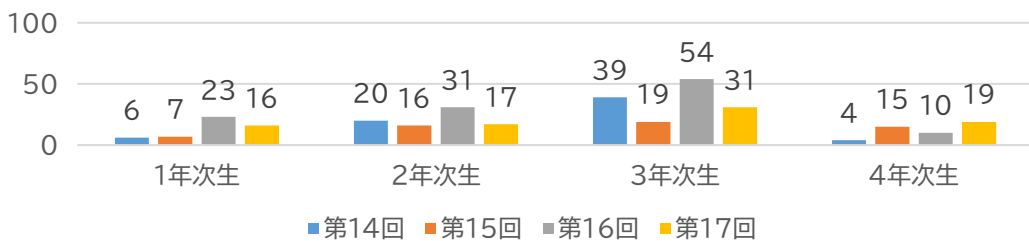
- 希望する講演会講師 (敬称略・五十音順) -
池上彰・江國香織・鯨井あめ・楠木建

統計はこちらです。

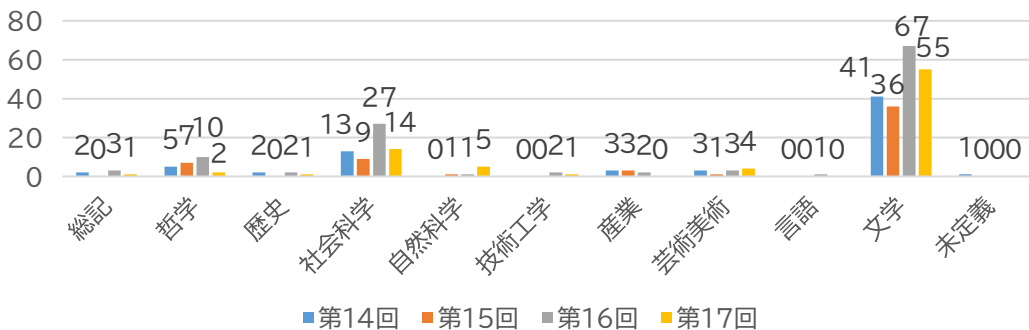
学部別応募者数



学年別応募者数



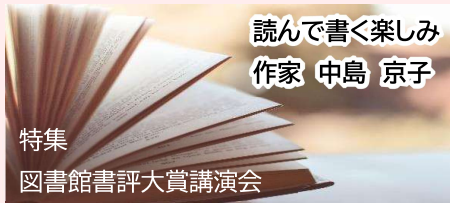
対象図書の分野別冊数



書評大賞には82名から83篇の応募がありました。学部別応募者数は文化学部、経済学部、経営学部・外国語学部の順となりました。初めて応募があった学部がある一方、前回(第16回)から人数が大きく減少した学部も見られます。授業や先生からの推薦で応募することが多いかもしれませんが、自ら積極的に応募いただきたいと考えています。

学年別応募者数は、例年と比較し4年次生が多い傾向がみられました。毎年書評大賞にチャレンジして複数回入賞されている学生もいます。読解力、表現力、文章力は必ず将来役立ちますので、ぜひ1年次生から応募してください。

対象図書の分野別冊数では、文学に関する資料を選択した学生が圧倒的に多く、次いで多かった社会科学分野の他は5件以下となりました。手に取りやすい小説だけではなく、この機会に普段手に取らないような分野の本を読んでみることで知識の幅を広げるきっかけになります。次回以降応募をお考えの方は、ぜひ新たな分野の図書にチャレンジしてみてください。



2022年6月7日(火)、作家の中島京子氏をお迎えし、図書館書評大賞講演会がナレッジコモンズで開催されました。この模様はMicrosoft Teamsでも生配信されました。中島氏は第143回直木賞受賞『小さいうち』をはじめ様々な文学賞を受賞されています。中島氏のやわらかな語り口により、和やかな雰囲気で行われました。

小説の題材は読んだものから見つけるタイプなので、今回の「読んで書く楽しみ」というテーマに自分は合っていると思います。今日は書評や小説を書きたい方に、参考になることをお話しできればと思っています。

〇「気持ち悪い…でも、おもしろい！」

田山花袋の『蒲団』って小説
読んだことのある方？



初めてあらすじを聴いた時は「気持ち悪い」と思ったけれど、読んでみたらおもしろかったんです！別の登場人物の視点で書いたらどうなる風になるんだろう、と思って書いたのがデビュー作(『FUTON』)です。

〇おもしろいと思ったことを、人に伝える

書評を書く方には、あらすじをきちんと書いてもらいたい、という気持ちがあります。最終的に、書評にあらすじを入れるかどうかはまたちょっと別話なんです。話の筋をきちんとまとめられるかどうか、というのが結構重要な気がします。あらすじにまとまらない本の場合、どういう構造になっているか、どういう言葉をつかって、何を表現しているかを書き表せるか。おもしろいと思ったことについて人に説明できるか、ということはとても大切だと思います。その小説をちゃんと読んでいるかどうかは、あらすじを書けるか書けないかが大きいですね。できない人も多いので、できなくてもガッカリすることはないんです。ある程度訓練でできるようになりますし、本を読む時に、技術的に身につけておいて損はないと思います。

〇どうして心が動くのか

書いている人の意図を読み取ることは大切です。ただし、それは作者のメッセージを読み取ることではありません。小説って、メッセージを伝えるために書いている、という場合は結構少ない。

書評を書く作品が、自分の好きな作品かどうかは大事ですが、感想を書いても書評にはならないですね。作品の中の登場人物やストーリーに、自分と似ている部分を見出し、その似ている部分を中心に読むと、書評とはズレてしまいます。

ただ、本を読んで感動する感覚って、「ああ、わかる」と感じることであったりするじゃないですか。しかもすごいのは、全然違う国のよくわかんない文化の話や、SF小説を読んだ時、自分の実体験とは違うものであっても「あっ、この感覚わかる」と思うことがありますよね。自分の想像力を拡大することで、知らなかったことを知っているように感じられる。小説を読んだ時の感動の、大きなひとつだと思います。心が動いた地点を出発点にして、「どうしてこんなに心が動くのか」を考えると(書評は)書けるような気がします。そして、それを他の人が読んで「あっ、そうだね。だからわかるし良いなって思うんだよね」と共通のものができていく。ものを読んで、感動して、書く。誰かが読んで、受け取ってくれる楽しさがそこにあると思います。

〇生々しさをフィクションにするのが小説

新人賞の選考委員をしていて気がついたのですが、新人さんは、最初に小説を書く時、自分の違和感や辛かったことなどの現実から書き始めることが多いように思います。作家の角田光代氏と話した時、書く時のおももにあるのは怒りや違和感だと言っていました。自分も考えてみたらそうなんですよね。

小説であれ論文みたいなものであれ、世界を見ていて、何か変な感じがある、でもまだ誰も書いていないことについて、言葉にして、文章にして、わかるようにしたい、というような欲望があるから人は物を書く。ただ、新人さんの作品を読むと、時々生々しくて、小説として違和感があることもあるんです。生々しさをフィクションの形に昇華させていくことが望まれる気がします。

「若いし、自分の体験をもとにしたものを書くべきだ」というアドバイスをもらったこともあるけれど、わたしは、傷をさらけ出すよりおもしろいことを誰かに伝えて、一緒に笑いたいタイプの作家なんだと思うんです。だから人のアドバイスはそんなに聞かなくてもいいかもしれない、と思っています。

書評は、おもしろかったこと、おもしろいと思った点をいかに伝えるか、いかにわかってもらえるか、ということに力点を置いて書いたら良いんじゃないかと思っています。

〇書評は、「読者の発見」

小説を完成させるのは「読者」だと思っています。先程も言いましたが、作家はメッセージを伝えようと思って小説を書いていません。小説はメッセンジャーではないので、読んでいる時間を共有してもらって、楽しんでもらうものだと思うんです。作者が正解を持っていて、読者が解答するものではないと思うんです。

「ここがおもしろいと思った」という感想に、著者が驚きをもらうことも。書評とは、読者の発見を書いたものです。(本は)読まれてなんぼ！

自分がおもしろいと思ったかどうか。なんでおもしろいと思ったのか。そこが書評の出発点です。

小説も書評も、「読者」がいることがすごく大きなことです。日記じゃないから、受け取る人にわかるように、おもしろさが伝わるように、それが、わたしが書評を書く時のポイントですね。

質疑応答をご紹介します

小説を書こうと思っているのですが、挫折して完成させたことがありません。
どのようなことに気がつけたらいいのでしょうか？



完成させてみることに書いてはすごくつらい。
山登りみたいなもので、途中でやめたらまた一から。

ブツブツ言いながら最後まで書きゃう。書き終わって読むと、客観的に見られる。
途中で諦めない方がいい。

できない(書けない)時はできないと諦めてやらないこともアリです。
デビュー作は仕事をしながらそのペースで書いて4~5年かかりました。
途中で諦めない方がいい。

本を読む時、作品に入り込んでしまいます。
書評を書くために、客観的に本を読むコツはありますか？



本に入り込んで良いと思う。
ただ、「私と似ている」とか「好き」とか「嫌い」という自分寄りの読み方だけしているのもったいない。

自分じゃない人が書いているものだから。自分だけじゃできない体験ができるから世界が広がります。

文章表現の際、大切にしている信念は？



描写をする時、使い古された言葉をつかわないように心がけています。

デジタル機器で文章を読んだり書いたりすることについてどう思いますか？



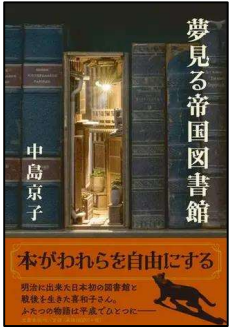
電子書籍は結構使います。
絶版になっていて電子書籍だけ出ているものもある。出張の際、出先で読みたいものが読める。ニュースもネットで読むことが多いです。

ただ、ネットの情報はどれを信じるか。自分で判断するネットリテラシーが必要です。

ネット上のエッセイや書評を依頼される際「一文をあまり長くしないで」と言われることがあります。媒体のために文体を変える必要があるの、伝える内容や文感が変わってくる怖さは感じます。

中島京子氏の著作

講演会で話しされた本を中心に紹介します。すべて図書館に所蔵があります。



『夢見る帝国図書館』

中島京子, 文藝春秋, 2019 (913.6||NAK 2階)

第30回紫式部文学賞受賞作品です。

「上野の図書館のことを書いてみないか」と提案され小説を書くことになったわたしと、その提案をした自由で無邪気な印象の喜和子さん、そして上野の図書館こと「帝国図書館」の物語です。

樋口一葉や宮沢賢治など文豪たちの帝国図書館エピソードや図書館の歴史(資金難の大変さが「行間から匂い立って」いたと中島氏は言います)を読み、書きたくなつたことから『夢見る帝国図書館』は生まれました。

帝国図書館は日本初の国立図書館です。

建物は改築され、国際子ども図書館として現在も東京・上野の地にあります。

帝国図書館や文豪のエピソードが気になったら
<国立国会図書館月報710号>を検索してみてね

『やさしい猫』

中島京子, 中央公論新社, 2021 (913.6||NAK 2階)

第72回芸術選奨文部科学大臣賞文学部門, 第56回吉川英治文学賞受賞作品です。スリランカ出身のクマさんと恋に落ちたシングルマザーのミユキさん。娘のマヤも含めた3人での生活は、クマさんが不法残留(オーバーステイ)として逮捕されたことで一変してしまいます。入国管理行政の問題を描いた家族小説です。

入管施設は、長期収容や医療体制が問題視されています。また、収容はされない仮放免にも多くの問題があります。

中島氏は、こうしたことをご友人から知り、“知っちゃったら書かないといけない”と思つたと言います。

物語には、ある少年が登場します。両親がトルコにルーツのあるクルド人の少年です。日本で難民認定を受けるのは難しい現実がありますが、2022年7月28日付でクルド人男性が難民認定されました。国内で初めてのことです。クルド人は埼玉県を中心に国内に約2,000人いるとされています。今後の難民認定の動向が注目されます。



- 『小さいうち』 中島京子, 文藝春秋, 2012 (913.6||NAK 2階・文庫)
『かたづの!』 中島京子, 集英社, 2017 (913.6||NAK 2階・文庫)
『長いお別れ』 中島京子, 文藝春秋, 2018 (913.6||NAK 2階・文庫) など他にも、所蔵しています。

講演会で紹介された本
すべて図書館に所蔵があります。

田山花袋 『蒲団』

『蒲団；一兵卒(改版)』田山花袋, 岩波書店, 2002 (913.6||TAY 2階・文庫)

“家に下宿させていた娘(芳子)に好意を抱いてしまった中年の小説家(竹中時雄)が、娘が郷里に帰った後、娘が使っていた蒲団に顔を埋めて泣く話”とお父様から聞いて、「気持ち悪い」とインプットされてしまった10代だった中島氏。

ですが、その後、時を経て読んでみたら、“ツッコミどころがたくさんありおもしろかった”のだそうです。

芳子の“尊敬の念”を、竹中は“自身への好意”だと勘違いし、芳子に入れ込んでいってしまう—この約2年に亘る騒動をずっと見てきた竹中の妻の視点から見ると「どういう風になるんだろう」と中島氏は考えたそうです。そして書かれたのがデビュー作の『FUTON』(913.6||NAK 2階・文庫)です。

読んでみたら
おもしろかった本



学生時代に
好きだった作家, 本



J.D.サリンジャー 「グラス家」シリーズ

『ナイン・ストーリーズ』J.D.サリンジャー；柴田元幸訳, ヴィレッジ
ボックス, 2012(933.7||SAL 2階・文庫) ほか

1953年から1965年に発表された『ナイン・ストーリーズ』『フラニーとズーイ』『大工よ、屋根の梁を高く上げよ；シーモア：序章』『ハプワース16,一九二四』に収録されているグラス家(長兄シーモアから末妹フラニーまでの兄妹とその両親)を題材にした短編・中編小説です。

ルシア・ベルリン 『掃除婦のための手引き書』『すべての月、すべての年』

『掃除婦のための手引き書：ルシア・ベルリン作品集』

ルシア・ベルリン；岸本佐知子訳, 講談社, 2022(933.7||BER 2階・文庫)

『すべての月、すべての年：ルシア・ベルリン作品集』

ルシア・ベルリン；岸本佐知子訳, 講談社, 2022(933.7||BER 2階)

自伝的小説です。幼少期に父親とともに各地を転々としながら暮らし、病気や虐待を経験。結婚を3回し、4人の子どもの母親となった作者。子どもたちを育てるために色々な職に就きました。自分の人生を題材にしているため、つらいことも書かれています。 “書き方(生々しい事実を小説に変換すること)が巧い”と中島氏は言います。

ミハイル・ブルガーコフ 『巨匠とマルガリータ』

『巨匠とマルガリータ(上・下)』

ブルガーコフ, 岩波書店, 2015(983||BUL||1, 983||BUL||2 2階・文庫)

ロシアを舞台にした、幻想小説的な作品です。ソ連時代の1929年から1940年にかけて書かれました。

中島氏は、ウクライナで戦争が起こったことをきっかけに、読みなおしたそうです。

作者が、どれほどの言論統制の中で書いていたのかといった背景が胸に迫ってきたと言います。

最近読んで
印象的だった本



第17回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

請求記号順
書名の【】内は、応募点数 / 書名右側の◆は、該当作品が収録された他社の所蔵図書を表す。

書名	著者	出版社	出版年	所蔵情報
やばいデジタル：“現実（リアル）”が飲み込まれる日	NHKスペシャル取材班著	講談社	2020	007.3 NHK 01383872 / 2階
自分で考える勇気：カント哲学入門	御子柴善之著	岩波書店	2015	134.2 MIK 01384171 / 2階
どんなことから立ち直れる人：逆境をはね返す力「レジリエンス」の獲得法	加藤諱三著	PHP研究所	2019	159 KAT 01359605 / 2階
ゼロ：なにもない自分に小さなイチを足していく	堀江貴文著	ダイヤモンド社	2013	289.1 HOR 01383875 / 2階
フィンランド幸せのメソッド	堀内都喜子著	集英社	2022	302.3892 HOR 01381377 / 3階
自分の頭で考える日本の論点【3】	出口治明著	幻冬舎	2020	304 DEG 01371529 / 3階
君主論【2】	マキアヴェリ著 / 池田廉訳	中央公論新社	2001	311.6 MAC 00965258 / 3階学部の学び(文化)
孤独の宰相：菅義偉とは何者だったのか	柳沢高志著	文藝春秋	2021	312.1 YAN 01383874 / 3階
予想どおりに不合理：行動経済学が明かす「あなたがそれを選ぶわけ」	ダン・アリエー著 / 熊谷淳子訳	早川書房	2013	331 ARI 20134060 / 2階(文庫)
日本がわかる経済学	飯田泰之著	NHK出版	2014	331 IID 01283064 / 3階
最貧困女子	鈴木大介著	幻冬舎	2014	368.4 SUZ 01314902 / 3階
「障害」ある人の「きょうだい」としての私	藤木和子著	岩波書店	2022	369.27 HUZ 20220878 / 3階
男の子のやる気を引き出す朝のことば	平岡宏一著	ビジネス社	2020	— ※ 所蔵なし
学年ビリーのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話【2】	坪田信貴著	KADOKAWA	2015	376.8 TUB 20224159 / 2階(文庫)
命をどこまで操作してよいか：応用倫理学講義	澤井努著	慶應義塾大学出版会	2021	490.15 SAW 01383876 / 3階
万人の脳を見た名医が教えるすごい左利き：「選ばれた才能」を120%活かす方法	加藤俊徳著	ダイヤモンド社	2021	491.37 KAT 01380340 / 3階
スマホ脳	アンデシュ・ハンセン著 / 久山葉子訳	新潮社	2020	491.371 HAN 01374960 / 3階
選べなかった命：出生前診断の誤診で生まれた子	河合香織著	文藝春秋	2018	495.6 KAW 01345432 / 3階
海外の安楽死・自殺補助と法	甲斐克則編訳	慶應義塾大学出版会	2015	498.12 KAI 01309271 / 地下1階
環境再興史：よみがえる日本の自然	石弘之著	KADOKAWA	2019	519.81 ISI 01357333 / 3階
超筋トレが最強のソリューションである：筋肉が人生を変える超科学的な理由	Testosterone, 久保孝史著	文響社	2018	780.7 TES 01383878 / 2階
心を整える。：勝利をたくり寄せるための56の習慣	長谷部誠著	幻冬舎	2014	783.47 HAS 20224153 / 2階(文庫)
高校野球の経済学	中島隆信著	東洋経済新報社	2016	783.7 INAK 01305936 / 2階
「弱くても勝てます」：開成高校野球部のセオリー	高橋秀美著	新潮社	2014	783.7 TAK 20171829 / 2階(文庫)
世界地図の下書き	朝井リョウ著	集英社	2016	913.6 ASA 20161801 / 2階(文庫)
どうしても生きてる	朝井リョウ著	幻冬舎	2021	913.6 ASA 20224160 / 2階(文庫)
人間失格(156刷改版)	太宰治著	新潮社	2006	913.6 DAZ 20211367 / 2階(文庫)
つめたいよるに(34刷改版)	江國香織著	新潮社	2014	913.6 EKU 20220975 / 2階(文庫)
たゆたえども沈まず = Fluctuat nec mergitur	原田マハ著	幻冬舎	2017	913.6 HAR 01328323 / 2階
僕は君を殺せない	長谷川夕著	集英社	2015	913.6 HAS 20170009 / 2階(文庫)
店長がバカすぎて	早見和真著	角川春樹事務所	2021	913.6 HAY 20224155 / 2階(文庫)
イノセント・デイズ	早見和真著	新潮社	2017	913.6 HAY 20224158 / 2階(文庫)
分身	東野圭吾著	集英社	1993	913.6 HIG 00768279 / 2階
白鳥とコウモリ	東野圭吾著	幻冬舎	2021	913.6 HIG 01379909 / 2階
宿命	東野圭吾著	講談社	1993	913.6 HIG 20211183 / 2階(文庫)
こちらあみ子	今村夏子著	筑摩書房	2014	913.6 IMA 20142571 / 2階(文庫)
ハーモニー	伊藤計劃著	早川書房	2010	913.6 ITO 20125114 / 2階(文庫)
テウトの創薬	岩木一麻著	KADOKAWA	2022	913.6 IWA 01383873 / 2階
オルタナート	加藤シゲアキ著	新潮社	2020	913.6 KAT 01371527 / 2階
神様	川上弘美著	中央公論新社	2001	913.6 KAW 20222744 / 2階(文庫)

第17回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

請求記号順

書名の【】内は、応募点数 / 書名右側の◆は、該当作品が収録された他社の所蔵図書を表す。

書名	著者	出版社	出版年	所蔵情報
世界から猫が消えたなら	川村元氣著	小学館	2014	913.6 KAW 20224233 / 2階(文庫)
コーヒーが冷めないうちに	川口俊和著	サンマーク出版	2015	913.6 KAW 01379493 / 2階
ハブン	川上未映子著	講談社	2009	913.6 KAW 01214779 / 2階
膠着	今野敏著	中央公論新社	2010	913.6 KON 20100604 / 2階(文庫)
余命10年	小坂流加著	文芸社	2017	913.6 KOS 20224156 / 2階(文庫)
晴れ、時々くらげを呼ぶ	鯨井あめ著	講談社	2022	913.6 KUZ 20224154 / 2階(文庫)
ミッキーマウスの憂鬱	松岡圭祐著	新潮社	2008	913.6 MAT 20221063 / 2階(文庫)
三島由紀夫レター教室	三島由紀夫著	筑摩書房	1991	913.6 MIS 20221829 / 2階(文庫)
カラフル	森絵都著	文藝春秋	2007	913.6 MOR 20223509 / 2階(文庫)
西由比ヶ浜駅の神様	村瀬健著	KADOKAWA	2020	913.6 MUR 20224152 / 2階(文庫)
三四郎(改版)	夏目漱石作	岩波書店	1990	913.6 NAT 20211450 / 2階(文庫)
地獄変・邪宗門・好色・藪の中：他七篇(改版)	芥川竜之介作	岩波書店	1980	913.6 AKU 20211906 / 2階(文庫)
ステップ	重松清著	中央公論新社	2012	913.6 SIG 20125062 / 2階(文庫)
誘拐ファミリー	新堂冬樹著	双葉社	2020	913.6 SIN 01383877 / 2階
旅のラゴス(16刷改版)	筒井康隆著	新潮社	2014	913.6 TUT 20221706 / 2階(文庫)
桜のような僕の恋人	宇山佳佑著	集英社	2017	913.6 UYA 20170597 / 2階(文庫)
儂い羊たちの祝宴	米澤穂信著	新潮社	2011	913.6 YON 20224157 / 2階(文庫)
キッチン	吉本ばなな著	新潮社	2002	913.6 YOS 20211191 / 2階(文庫)
夏の庭：the friends(20刷改版)	湯本香樹実著	新潮社	2001	913.6 YUM 20220477 / 2階(文庫)
アーモンド	ソーン・ウォンピョン著 / 矢島暁子訳	祥伝社	2019	929.13 SON 01356913 / 2階
82年生まれ、キム・ジョン	チョ・ナムジュ著 / 斎藤真理子訳	筑摩書房	2018	929.13 TYO 01374198 / 2階
ヴェニス商人	シェイクスピア著 / 松岡和子訳	筑摩書房	2002	932.08 SHA 10 01063663 / 2階(文庫)
四つの署名(112刷改版)	コナン・ドイル著 / 延原謙訳	新潮社	2011	933.6 DOY 20211329 / 2階(文庫)
ハックルベリー・フィンの冒険(改版)	マーク・トウェイン著 / 村岡花子訳	新潮社	1988	933.6 TWA 20221012 / 2階(文庫)
冷血	カポーティ著 / 佐々田雅子訳	新潮社	2006	933.7 CAP 20221711 / 2階
ロング・グッドバイ	レイモンド・チャンドラー著 / 村上春樹訳	早川書房	2007	933.7 CHA 01139198 / 2階
アクロイド殺し(5版)	アガサ・クリスティ著 / 松本 恵子訳	早川書房	1975	933.7 CHR 00701686 / 2階
グレート・ギャッツビー 【2】 ◆	フィッツジェラルド著 / 小川高義訳	光文社	2009	933.7 FIT 20212431 / 2階(文庫)
チーズはどこへ消えた？	スペンサー・ジョンソン著 / 門田美鈴訳	扶桑社	2000	933.7 JOH 01350000 / 2階
ミー・ピフォア・ユー：きみと選んだ明日	ジョージ・モイーズ著 / 最所篤子訳	集英社	2015	933.7 MOY 20210467 / 2階(文庫)
動物農場(33版)	ジョージ・オーウェル著 / 高畠文夫訳	角川書店	1991	933.7 ORW 20081040 / 3階学部の学び/(法)
消失の惑星(ほし)	ジュリア・フィリップス著 / 井上里訳	早川書房	2021	933.7 PHI 01383879 / 2階
ヴァレンシュタイン	シラー作 / 濱川祥枝訳	岩波書店	2003	942.6 SCH 01013906 / 2階(文庫)
たのしいムーミン一家(新装版)	ヤンソン著 / 山室静訳	講談社	2011	949.83 JAN 20114717 / 2階(文庫)
星の王子さま	サン＝テグジュペリ著 / 河野万里子訳	新潮社	2006	953.7 SAI 20220546 / 2階(文庫)
アルケミスト：夢を旅した少年	パウロ・コエーリョ著 / 山川純矢, 山川亜希子訳	角川書店	1997	969.3 COE 20211226 / 2階(文庫)
デカメロン	ボッカッチョ著 / 平川祐弘訳	河出書房新社	2012	973 BOC 01241062 / 2階
罪と罰(上、下)(改版)	ドストエフスキー著 / 工藤精一郎訳	新潮社	2010	983 DOS 1 20210992 / 2階(文庫) 983 DOS 2 20210993 / 2階(文庫)

<第17回 京都産業大学図書館書評大賞 概要>

目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領(抜粋)

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生

2. 応募要件

- (1) 対象とする図書の所蔵は問わない。ただし、マンガ・雑誌・写真集は除く。
- (2) 使用する言語は、日本語とする。
- (3) 文字数:1篇につき1,600字以上2,000字以内。応募原稿様式は図書館 Web サイトから入手(マイクロソフト社 Word ファイル)。
- (4) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること(盗用厳禁)。
- (5) その他:1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

82名83篇

実施日程

応募期間:2022年5月23日(月)～7月25日(月)

入選発表:2022年12月1日(木)

表彰式:2023年1月18日(水)

<選考委員より ひとこと>

【大平 睦美 委員長】

みなさんの書評を読んで、普段自分では選ぶことのない本と出会うことができました。読み手の心に響く書評は自分の言葉で表現されていることが大切だと感じました。書評を書くことを通して、自分の言葉で見知らぬ読み手に、感動を伝える喜びを多くの方に経験して欲しいと願います。

【藤井 秀昭 委員】

応募作品を楽しく拝読いたしました。コロナ禍やウクライナ情勢などで閉塞感が漂う時代局面ですが、学生ならではの青春時代に内面的に繊細に感じる作品テーマに関する書評が多かったように思います。

【赤崎 孝文 委員】

書評を書くということは、コンテストに応募することを目的として書評を書くもよし、誰に見せるでもなく書評を書いて、共感を得たかったら応募してみるもよし。目的と手段がどうあろうと、自分の考えをまとめるのは良いことだと思います。

【西田 貴明 委員】

数多くの書評を拝見する中で、それぞれの書評から作成者の苦勞の跡が感じられましたが、書評は、自分の理解や関心を整理し、発信力を養う重要な機会だと感じました。今後も、多くの方に参加していただきたいです。

【中澤 正江 委員】

こういった作業に関わることが少ないため、新鮮な気持ちで取り組みました。もう少し、評者独自の視点を曝け出すような書評であっても良いのでは、とも感じました。

【吉田 浩史 委員】

自分ではない誰かに「この本読んでみたい！」と思わせるって実はとても難しいことだと思います。皆さんの作品を形作るたくさんの方の见えない努力に敬意を表します。

【今井 美裕子 委員】

学生のみなさんに読んでもらいたい！と心を込めて図書館蔵書として選書したその本で書評大賞に応募してもらえるというのは心が通じたようでうれしいです。書評大賞を通じてみなさんと対話できれば幸いです。

【田中 雅子 委員】

応募して下さった学生の皆様、ありがとうございます。今回の書評作品をすべて読ませていただき、まずは皆さんの文章力の高さに驚かされました。読み応えがある応募作に触れ、自分でもじっくりと読書の時間をとりたいと思いました。

【島田 武範 委員】

SNS に代表される意見の表明と書評の大きな違いは、いかにして自分の言葉で他の人からの「共感」を得られるかにあると考えています。読むこと・書くことから逃げることなく、自ら積極的にチャレンジしていきましょう。